一般部門

光が差した瞬間

【楠（くすのき） 由美（よしみ）・奈良県】

「この子と一緒に死のうか…」。そんな思いが何度も頭をよぎるほど、当時の私は心身ともに疲れ果てていました。息子がアトピー性皮膚炎と診断されたのは生後6カ月の時。行き先も告げられず、急に暗いトンネルの中に放り込まれた気分でした。

息子は全身のかゆみから、抱っこしても昼夜を問わず泣き叫び、引っかき傷が絶えず、身に着けるものやシーツは毎日血だらけ。寝る時は背中を何時間もさすり続け、やっと寝たと思えばかゆみでまたすぐに目を覚ます…そんな日々が3歳になるまで続きました。

顔の湿疹が目立ったため、道を歩いていると「わあ、汚い」「それうつるの？」。そんな言葉を時々掛けられることもありました。周りに同じ疾患の子はいなかったため、悩みもなかなか分かってもらえず、迷い込んだこのトンネルには出口なんてない…。そう思っていました。

そんな時、転居先で初めて訪れた病院で、看護師のＮさんに出会いました。診察で医師と私のやり取りを見ていたＮさんは、「お母さん、いっぱい病気や薬の勉強したのね。すごい」。笑顔でそう言い、「お母さんもＫ君も今まで頑張ってきたね」と誰も触りたがらなかった息子の手をぎゅっと握ってくださいました。

私は急に力が抜けて、気が付くと涙がぽろぽろこぼれて止まらなくなっていました。不思議そうに私の顔を見上げる息子と、驚きながらも背中を優しくさすってくださったＮさんの手のぬくもりを今でも忘れることができません。

「頑張って」と、いつも言われてきた私にとって、「今まで頑張ってきたね」というＮさんの言葉は、長いトンネルに初めて差し込んだ光でした。私たち親子の存在を認めてもらえ、救われた気がしたのです。Ｎさんの言葉（光）を支えに、今も一進一退しながらも中学生になった息子と前に進んでいます。

私は2年前に看護学生となり、今Ｎさんのように誰かの力になりたいと看護師を目指しています。